

軍港・呉における野球発展過程の考察

——呉海軍工廠が果たした役割——

渡 辺 勇 一*

はじめに

明治初期、米国から日本に伝わったベースボール（野球）は、まず東京の学生たちを中心に広まっていった。学生野球に「武士道的」趣を求めた旧制第一高等学校（一高）の全盛期を迎え、対抗した早稲田、慶応義塾など私立大学の強化もあって主に学生を主体として競技性を高めていった。

近代日本のスポーツ、とりわけ野球の技術、普及は、こうした学生たちが属す上級教育機関から旧制中学など下部の教育機関へ伝達されていった。東京遊学から郷里へ戻った卒業生や新たに赴任した教師らが普及の先駆けとなった。あるいは、その地方の最高教育機関である帝国大学、高等学校（旧制）、専門学校などが大会を催すなど指導的役割を演じて、普及に輪をかけた。中央から地方へ、上級学校から中学校と伝播した野球は明治半ばから後半へかけて各地で球音が高まっていった¹⁾。

広島県でも明治中期、野球をまず導入したのは広島市内の広島師範学校（現広島大学教育学部）や県立広島尋常中学校（後の広島一中、現広島国泰寺高校）で、東京の高等教育機関を終えた教師たちが普及に大きな役割を果たし、生徒たちの運動部活動として定着していった。

ところが、こうした現象と一線を画す形で独自に発展を遂げたのが「海軍の街」呉市である。1889年の鎮守府設置以降、海軍の進展・拡張と

ともに膨張した呉は1902年、市制を敷いた。しかし、当時の軍港・呉には中学校は皆無、最高の教育施設は高等小学校が唯一であった。市立中学校の開校は1907年まで待たざるを得なかった²⁾。

上級学校のない呉の野球は海軍で根付き、軍艦や兵器などの製造に従事する軍需工場の工具たちに普及した。先導的な役割を果たしたのは呉海軍工廠首脳（将校）らであった。学生時代に興じたであろう野球を工具たちに推奨した。体位向上を狙った措置であったが、同時にレクリエーションの一環として位置付けた。瞬く間に工場内にチームが増え、各部対抗の競争意識の色彩を帯びて広まった。やがて、工廠野球チームは独自に「呉野球協会」を組織し、大正中期には全市の他競技団体をも統括する「呉体育協会」へと拡大した。

本論考は軍港・呉で定着した野球の足取りを追ひ、いわば実業団スポーツの特異な形態として発展を遂げた実態に迫るとともに、地域スポーツに及ぼした影響を考察する。

軍隊とスポーツに関する先行研究は極めて乏しい。管見の限りでは軍事史の一環として1920年代以降の日本陸海軍スポーツに焦点を当てた高嶋航の「軍隊とスポーツの近代」³⁾が呉鎮守府の野球、バレーボールの盛況ぶりを概観しているのがほぼ唯一であろう。海軍史や呉海軍工廠の来歴に及ぶ諸資料の中で、スポーツに類する記述は容易に見出すことができなかった。

* 広島経済大学経済学部教授

1. 呉 と 海 軍

1.1 海軍呉鎮守府の開庁

明治新政府は1869年、兵部省を設置し、近代の軍制をスタートさせた。1873年、陸軍省と海軍省が創設された。軍港に関しては東海及び西海鎮守府を設置することが決定し、1876年に東海鎮守府庁舎が横浜に仮設置された。同鎮守府は1884年、横須賀に移転した。同時に、海軍省は西海造船所（鎮守府）設立計画を進め、候補地の調査に着手した。

特命を受けた肝付兼行少佐は1883年2月、呉湾へ回った。一行は船上からの実視により即座に、西海鎮守府の地は「此呉湾ヲ除キテ他にニナシト決意」（呉市史 第三巻）し報告した。

1886年4月22日、海軍条例が制定され、全国の5軍港に鎮守府を置くことになった。翌5月4日、第2海軍区鎮守府の位置として安芸国安芸郡呉港、第3海軍区鎮守府として肥前国彼杵郡佐世保港が決定（勅令第39号）した⁴⁾。同年10月末から鎮守府建設工事が始まり、一日当たり18,000人から19,000人の建設労働者が従事したという。

呉鎮守府は工事の遅延が影響し開庁は1889年7月1日、開庁式は翌1890年4月21日となった。同鎮守府司令長官には横須賀鎮守府長官だった中牟田倉之助中将が任命され、横須賀から水兵360人を移送して佐世保とともに開庁した。翌年の開庁式には明治天皇が列席した⁵⁾。

それまで平穏な歩みを続けていた半農半漁村、呉浦の住民の生活は、鎮守府設置で大きく変化した。従来からの荘山田、和庄、宮原3村に、隣接の吉浦村を加えた4村の人口動態は表1の通りである。

それまで大きな変化が見られなかった4村の人口が1887年、2万人を突破する。鎮守府開庁後の1890年は2万5千人に迫った。

鎮守府の開庁は呉地方の住民の生活に大きな

表1 呉浦の人口動態

単位：人

年	荘山田村	和庄村	宮原村	吉浦村	合計
1885	4,258	3,481	5,018	5,061	17,818
1886	4,280	4,466	6,210	6,210	17,370
1887	4,823	6,083	6,259	6,259	20,800
1890	5,325	8,549	7,139	7,139	24,469

出所：呉市役所（1976）「呉市史 第四巻」p. 14

変化をもたらした。市街地の整備が進み、交通や産業にも影響を与えた。何より俗称にすぎなかった「呉浦」「呉村」の呼び名が、鎮守府設置により正式に「呉」の地名を冠することになった。1887年、鎮守府条例の改正に当たって各鎮守府は所在の地名を冠することになったが、第2海軍区鎮守府は「宮原」となるところを、一漁村の名では貧弱と異論があり、海軍当局は古くから一帯の総称である「呉」を採用したという⁶⁾。1887年に荘山田郵便局は「呉郵便局」と改称⁷⁾、呉の地名として定着していったのである。

1.2 呉海軍工廠の設立と拡張

海軍省では既に1882年の時点で、軍艦整備構想を実現するために大規模な造船所を建設するという計画が立てられていた。翌年、朝鮮で起きた「壬午事件」や朝鮮半島支配を強化させつつある清国に対応するべく、海軍当局は急速に軍艦整備の必要性を説き、国内製造方針を立てた。

呉鎮守府造船部の建設は開庁の1889年から8年間、216万円の予算で実施され、第1船渠（ドック）、製図工場、第1船台と造船工場などが完成して小艦艇の建造や修理施設が整い、次第に技術も高まった。日清戦争終結以後、呉の造船部は急速にその規模を拡大していった⁸⁾。1897年10月、呉鎮守府造船部は呉海軍造船廠へ改組した。直後の10月27日、呉における最初の

軍艦（通報艦）「宮古」（1,800排水トン）が進水、1902年に巡洋艦「対馬」（3,120排水トン）、翌年砲艦「宇治」（620排水トン）が進水するなど次第に艦艇建造の経験を積んでいった⁹⁾。

一方、呉鎮守府には造船部とともに兵器の修理を行う兵器部が存在した。当時、東京・三田にあった海軍造兵廠は兵器製造施設としては規模が小さく、海に面していないなどの欠点があり、新造兵廠の設立が検討された。新造兵廠は呉鎮守府兵器部の隣接地に建設が決まった。工事用地の整備とともに、兵器製造所としての設備も進み1893年には日本最初の100トンクレーン（英アームストロング社製）を据え付けた。日清戦争の開戦とともに兵器の国内製造も必要性が増し1897年、呉海軍造兵廠へと改組した¹⁰⁾。

大型兵器の製造ができるようになった造兵廠は、装甲板や砲身などの素材を生産するための製鋼施設の建造を目指した。既に艦砲用の鑄造を行っていたが、さらなる大艦巨砲、軍備増強体制に即応するための鉄材供給の必要性から製鋼工場が造兵廠に設立された。

拡充を続ける呉鎮守府の造船廠と造兵廠は1903年11月10日、合併して「呉海軍工廠」に統一された。呉工廠の組織は、造船部、造兵部、製鋼部、造機部、会計部、需品庫で構成した。従業員数は増加の一途となった。表2は、鎮守

府開庁から呉工廠設立時の役員・従業員（職工）数の推移である。20世紀初めに従業員1万人を超える巨大工場が出現した。

2. 野球の伝播

2.1 野球の伝来

国内最大級の軍需工場として規模を拡大しつつあった呉海軍工廠の従業員（職工）たちの間で野球が普及する過程を詳述する前に、野球の日本国内での伝播の足跡を検証する。

広く知られているように、日本へベースボール（野球）が輸入されたのは1872年、米人教師ホーレス・ウィルソンが東京・一ツ橋の第一番中学校（後の開成学校、大学予備門、東京大学）でノックやバッティングの指導をしたのが始まりという¹¹⁾。

ウィルソンの伝えた野球は、米国帰りの鉄道技師、平岡靱（ひらおか・ひろし）によって広がりを見せた。1876年、米国留学から帰国した平岡は新橋鉄道局に技師として勤務する傍ら2年後、同僚たちを誘ってわが国最初の野球チーム「新橋アスレチック倶楽部」をつくる。これに近在の学生たちが加わり、ユニホームやマスクも作った。

新橋倶楽部は1882年、駒場農学校（現東大農学部）と最初の試合をしている。さらに、平岡の教えを受けた伯爵徳川達孝は邸宅の広い庭園内に運動場を造り、「ヘラクレス倶楽部」というチームをつくり新橋倶楽部との対抗戦を行ったという¹²⁾。

新橋倶楽部は1887年、平岡の退職とともに解散したが、野球は学生の間に広く普及し始める。概ね平岡の影響を受けた者たちが中心であった。神田（1989）によれば、1884年ごろから明治学院、青山英和学校、慶応義塾、工部大学校、駒場農学校、それに大学南校や開成学校の後身の一つ、東京大学法学部などである。大学予備門は1886年、第一高等中学校となり校友会野球部

表2 呉海軍工廠の役員・従業員数の推移

単位：人

年	役員	従業員	年	役員	従業員
1890	11	839	1897	57	7,227
1891	22	1,433	1898	69	5,651
1892	27	1,874	1899	90	6,383
1893	29	1,712	1900	101	9,162
1894	29	2,475	1901	114	10,967
1895	32	3,310	1902	125	12,378
1896	41	3,780	1903	92	12,887

出所：呉市役所（2002）「呉の歴史」p. 232

(ベースボール会)が発足した¹³⁾。

各校がしのぎを削る中で頭角を現したのは第一高等中学校(一高)で、全寮制となって野球は盛んになった。猛練習によって、いわゆる「武士道野球」に貫かれた一高は明治学院を破り、都内の学生連合チームである溜池倶楽部を下した。特に1896年には横浜外人クラブと初めて試合を行い、29-4の大差で勝利を得た。初の国際試合ともいべき戦いぶりの結果は新聞に大きく報じられ、野球人気が一気に高まった。

一高の黄金期は1903年まで続いた。慶応、早稲田両大学が次第に実力をつけ一高に肉薄し、慶応は1904年初めて一高を破り、早稲田もまた一高、慶応、学習院を下した。耳目は早慶両校の対決へと移っていったのである¹⁴⁾。

2.2 地方への広がり

学生を中心に広まった野球は全国各地の中学校や師範学校などへ根を下ろし始めた。先導役は東京で習い覚えた卒業生や教師らであった。初めは運動会の種目として行われたり、校内の対抗試合であったり、あるいは通学生対寄宿舎生の試合として実施されたりした。

たとえば広島の場合、最初に野球を試みたのは県立広島尋常中学校(後の広島一中、現広島国泰寺高校)である。同校の校友会誌「鯉城」創刊号(1897年)掲載の野球部報によると、「明治二十二、二十三年頃、野球会一部熱心家の間に設けられ」とある¹⁵⁾。1889年には広島地方に球音が届いていたとみるべきであろう。

旧福山藩の藩校を起源とする福山中学校(現福山誠之館高校)の「誠之館百三十年史」によると、1896(明治29)年頃の創立記念日などに野球や撃剣(剣道)の試合があった、と記し、1898年には高松中学校(香川県)と試合をしたとの記述¹⁶⁾がある。尾道市の尾道商業学校(現尾道商業高校)も1898年に野球部結成の機運が起こり¹⁷⁾、同年には県北の三次中学校(現三次

高校)でも野球に興じていたという¹⁸⁾。広島商業学校(現広島商業高校)は開校の1899年を野球部創設¹⁹⁾としている。

一方で山口県では上級学校の旧制山口高等学校(後に山口高商、現山口大)が起源と見られる。山口高等商業学校沿革史(1940年)には1889年、天長節の祝賀運動会のプログラムに「ベースボール」が記載されている。当時は山口高等学校を名乗り、一高等と並ぶ官立高等学校であった。山口高校野球部は先見性に富み、1897年に福岡へ遠征して第五高等学校(五高)との試合に臨んだ。さらに1899年には、統一ルールを求める声に応じ、独自に編纂した「野球規則」を県内の中学校に配布している²⁰⁾。

山陰地方では1889年、鳥取県尋常中学校(現鳥取西高校)の運動会の演目にベースボールがあった(同年5月29日付鳥取新聞)と同西高校野球部史は記述する²¹⁾。島根県では1893年に京都の第三高等学校の生徒だった高橋慶太郎らが夏休みに帰省し、習い覚えた野球を高橋の弟が在籍した島根第一尋常中学校(現松江北高校)生徒に教えたのが最初という²²⁾。岡山はやや遅れ、1895年に京都・同志社中から転校してきた生徒が関西中学校(現関西高校)で野球部を創設したという²³⁾。

このように明治20年代以降、中国地方でも各地の中学校を中心に野球が導入されたことがうかがえる。

2.3 呉市の教育事情

広島をはじめ各地で野球が始まったころ、呉では鎮守府が開庁し、人口は急膨張を遂げていた。しかし、上級学校はおろか、中等教育機関すら存在していなかった。1872年の学制発布を受けて小学校が誕生し、1888年に呉呉高等小学校が開校した。しかし、この高小が最高の教育機関であった。

人口急増の呉は1902年10月に市制を施行した。

和庄町、莊山田村、宮原村と吉浦村から川原石・両城地区を分離していた二川町が合併し「呉市」が発足、人口は60,124人にのぼった。しかし、市当局の課題は人口増に伴う小学校の拡充が急務だった。1904年度の市財政統計によれば全歳出85,390円に対して、教育に関わる経常費・臨時費の合計は39,994円で、支出の実に46.8%にのぼった。急場の就学対策としてすべての尋常・高等小学校（11校）で午前、午後の二部授業を実施している²⁴⁾。

呉が市制を実施した1902年、広島市では広島高等師範学校（現広島大学）が開校した。中学、師範学校教員養成を主眼とする官立学校で、東京に次ぐ二番目の高等師範学校であった。当時、広島県内には広島、福山、三次、忠海の4県立中学校と広島高師付属中学校、広島市内には職工学校、商業学校の実業校や修道、仏教、明道などの私立中学校が存在した。

しかし、人口6万人超える呉市には中学校そのものがなく、向学心に燃える児童の上級学校進学道は遠かった。当時、呉高等小学校の卒業生は毎年200人前後いたが、広島などの中学校に進んだ在学学生は合わせて110人余りであったという²⁵⁾。呉市がやっと市立中学校建設に踏み切るのは1906年であった。

他の都市のように上級学校進学者が母校の後輩に野球を伝えようにも、呉市には受け皿そのものが存在しなかったのである。

3. 呉海軍工廠と野球

3.1 技術士官の試み

呉地方への野球の導入は、呉鎮守府造船廠（後の工廠造船部）から始まった。呉と野球の関係を詳述した唯一の文献である「呉野球史」（1926）は冒頭、「山田工学博士の考案」の見出しとともに、「呉に野球の移入されたのは今から27年前の明治32（1899）年の事に属し」と書き起こす。「当時造船製図の主任であった山田

中技士は頗る野球を愛好され（中略）野球を廠内に奨励せしめた」²⁶⁾と紹介した。

野球史の著者は、大正末期の地元紙呉日日新聞の記者、中谷白楊で「定価70銭」の自費出版である。なお、後年出版された「大呉市民史大正編」や呉市が刊行した「呉市史 第四巻」の呉野球の起源については、いずれも中谷の著作を底本としている。

中谷の呉野球史に登場する「山田中技士」とは、後に呉海軍工廠第2代造船部長を務めた元海軍造船中将・山田佐久のことである。

呉野球史によれば、山田が工場内で野球を奨励した理由は「職工間に体質虚弱的者が多く、このまま放任しておけば将来憂ふべきものありとて体質改善策として」²⁷⁾というものであった。

職工の体質虚弱を裏付けるデータは公表されていないが、1904年に開設した呉工廠従業員・家族用の呉共済病院の資料によれば、開設翌年（1905年）の延べ入院患者11,116人、延べ外来患者は64,283人である²⁸⁾。このうちの程度が「体質虚弱的な職工」であるか判断しかねるが、山田には工員たちのひ弱さが感じ取れたのであろう。

技術（造船）士官の山田の発案で、造船廠内の造船製図と造機製図の有志たちによるチームが生まれた。造機とは機関や機械などエンジン関連の部門である。発足したばかりの造船廠チームは早速、海軍射的場を利用して練習に励んだ。射的場は後の呉市二河グラウンドであり、現在は市営二河野球場一帯である。呉の野球始まりの地が、今も球場として存在している事実興味深い。

造船廠チームはやがて造船科・造機科に分かれる。当時の様子を呉野球史は「スパイクとかまたはユニホームなどももちろんなく、従って草履（ぞうり）や草鞋（わらじ）、襷掛けといった調子で」²⁹⁾とする。士官の山田も時折練習ぶりをのぞいたという。1903年11月、造船廠と造

兵廠が合併して呉海軍工廠に統一されて一大軍需工場として進み始め、野球チームにも造兵が加わった。造船、造機、造兵の各チームは互いに意識し合いながら練習を重ね、次第に野球が従業員たちの間で熱を帯びてきたのは確かなようだ。

工廠野球チームは明治期、しきりに広島へ遠征し、中学校や広島高師と対戦している。発足後日も浅く、腕試しであったのだろう。1907年の新聞に造船（製図）チームが広島の仏教中学校（現崇徳高校）と対戦した記事が掲載されている。10月6日、広島高師グラウンドでの試合の様子であるが、「野球界小言」とする見出しで「呉方はバッテリーをはじめその他に至るまでよく揃い、送球受球ともに確か」「攻撃にても、呉方は練習したりしと見えて、巧みなるバントをいでし、仏中を狼狽せしめて大勝を博したり」³⁰⁾と造船軍の優勢ぶりを伝えている。

造船軍は同年11月3日、広島高師に1-2で惜敗し、午後は明道中学校（後に廃校）に13-3と大勝した。いずれも新聞は造船得意のバント戦法を絶賛している³¹⁾。

3.2 呉野球協会の結成

造船、造機、造兵と名乗りを上げた各チームは、工廠内の組織改正に伴って数が増した。すなわち、造船・造機・造兵・製鋼の4部で発足した呉工廠は1910年、造兵部が砲煩・水雷の2部に分かれた。翌年は火薬試験所が新設された。その都度野球の新チームも生まれた。

明治末から大正期にかけて一層結成が相次ぎ、部内の各工場に新チームが誕生するなど離合集散を繰り返した。造兵は「砲煩」と名称を変え、火薬試験場は「パウダー」のチーム名を名乗った。製鋼部にも誕生し、パウダーは「スター」と名前を改めた。新設の水雷部第4工場からは「巴」チームが生まれた。「山田（佐久）将軍から特にコーチを受けた」と呉野球史は記述する³²⁾。

野球熱の高まりを受けて地元新聞社が後援に乗り出し、1913年10月に呉日日新聞社は第1回近県実業野球大会を始めた。呉市始まって以来の野球大会には、工廠の造船、造機、砲煩、火薬各部から7チーム、広島からは広島商業、修道中、広島中が参加した。決勝は造船と砲煩が対戦し13-1で砲煩が初代王者となった³³⁾。

日ごろ工廠各チームの練習や試合の場となっていた海軍射的場は、呉鎮守府にほど近い宮原地区に移転し、市当局は1914年、新たに二河グラウンドとして造成した。ますます野球熱は燃え上がり、「大呉市民史」は「大正初年は猫も杓子もしきりに雨後の竹の子のごとく幾多のチームが編成されて、特に氾濫時代となった」³⁴⁾と指摘している。

グラウンドの完成で大会も増えた。廠内の親睦組織である呉工廠倶楽部に野球部が新設され、呉野球大会が1914年から始まった。造船、砲煩、火薬、水雷、製鋼、MC、機械、電、巴などがこぞって参加し、3-2で造船を下した火薬の優勝となった。工廠倶楽部の大会は以後も毎年開催し、中国新聞呉支局は1914年に県下野球大会を主催して造船、造機、会計、火薬の呉勢と鯉城クラブ、修道中、広島商業、広島師範の広島勢が対戦した。当時の地元メディアはこぞって工廠野球の白熱ぶりを報じると同時に、大会を後援した。呉日日、中国両紙に対抗して大阪朝日新聞呉通信部も1915年、第1回実業野球大会を開催した。

だが、呉工廠内のチームを中心とした過熱ぶりは当事者たちも認めるところであった。市街地の発展に呼応して空地は減少し、二河グラウンドの争奪戦は激しさを増し、試合のたびにトラブルや審判への不満が続出するようになった。このような風潮を是正するため工廠の火薬、水雷、砲煩、造船の4部が声を挙げ1916年3月、「呉野球協会」設立が提案された³⁵⁾。部内チームから発足した工廠野球は17年後、自ら主体的

に組織化を図るまでに発展し、「市民権」を得たということが出来よう。

協会発会式は7月16日、二河公園で開催した。会長には沢原俊雄市長を選出、「野球における一切の事項は悉く協会に於いて整理し、かつ毎年年初秋2季に実業野球大会を挙行する」（「呉野球史」）ことを申し合わせた。加盟したのは以下の17チームである³⁶⁾。

火薬、砲煩、造船、造機、水雷、製銅、
MC、機械、雷、巴、宣候、砲架、甲城、
五友、造船第二、ヂャイアント、学友

呉野球協会は創立の翌年、1周年を記念して早稲田大学を招待した。この年5月、東京・芝浦での第3回極東競技選手権大会で優勝した早大は夏季休暇を利用して朝鮮・満州遠征に赴く途中だった。呉協会側は初めて「全呉」軍を結成した。工廠内の有力選手を選抜し、早大と2試合行った。5-0、7-2でともに早大が勝利を飾った。以後、「オール呉」「全呉」は、呉実業野球界を代表する実力チームとして認知されるのである³⁷⁾。

3.3 呉野球協会の反響

工廠から派生し、協会組織を立ち上げるまでに発展した呉野球界は当時のメディアに驚きの目を持って受け止められている。大呉市民史（上巻）によれば、1916年3月22日に工廠の火薬、造船など4部による協会発起の呼び掛けと宣言文が地元紙に載った。7月16日の発会式の模様は中国新聞が詳しく報じ、「斯界の統一を期し、本技の発展を図りて、身体の鍛錬精神修養の真髓を発揮せんがために、ここに協会を組織した」とする沢原会長の式辞全文を掲載した³⁸⁾。

協会発足1周年記念として7月、早大を招待し、8月には慶大チームも招き全呉チームと対戦した。後述する呉体育協会の初代会長、沢原亮吉が慶大野球部OBだった縁での招待でもあるが、学生野球界を代表する早慶両校のナイ

ンが夏休暇中に相次いで呉を訪れた事実は興味深い。

当時の代表的な野球雑誌「野球界」（野球界社）の編集長だった小泉葵南は、1920年に出版した「野球新教範」の「全国球界の現状」とする項で呉協会に触れている。「山陽で一番盛んなところは広島よりもむしろ呉であろう。海軍工廠の当局者が奨励するようになってから、俄然盛んになった。（中略）野球協会などが組織されて一切のことを処理し、毎年工廠内の争奪戦を行ったり、機を見て早慶両大学を招聘し、親しく科学的野球を見学して技術の増進を図ったりして」³⁹⁾などと紹介する。

小泉は翌1921年にも「ベースボールの見方」とする著作の「全国野球界人国記」の中で、「海軍工廠の当局者が、青年の意気の漸次衰えつつあるのを見て、その予防策としてこの技を奨励するようになった」⁴⁰⁾と、呉野球の起源にも記述は及んでいる。先述のように地元呉日日新聞の記者、中谷白楊が「呉野球史」を発刊したのは1926年であり、いち早く協会発足から4年後の1920年に出版された小泉の著作などを通じて呉野球協会の存在は、好球家に広く知られていたのではあるまいか。

3.4 呉野球の始祖・山田佐久

呉海軍工廠の母体、造船廠で従業員の体質改善を求めて野球を奨励した造船士官の山田佐久とはいかなる人物であろうか。主な軍歴は表3の通りである。

海軍の現役造船士官は28年間、うち20年間（海外出張期間を含む）が呉造船廠・呉工廠での勤務であった。海軍少技士（少尉相当）から大監（大佐相当）までの階級を過ごした。

この軍歴と中谷が著した呉野球史を比較すると明らかな誤りが見出せる。それは、山田が工員たちに野球を奨励した時期と階級である。中谷は「明治32年、山田中技士」と記した。しか

表3 山田佐久の軍歴

1866（慶応 2）	5. 10	生まれ，本籍・東京府豊多摩郡杉並村
1887（明治20）	9	帝国大学工科大学造船学科入学
<海軍技術学生>		
1890（同 23）	7	帝国大学工科大学造船学科卒業
7 英国留学（英アームストロング社）		
1892（同 25）	12	横須賀鎮守府造船部造船科主幹<海軍少技士>
1894（同 27）	3	呉鎮守府造船部造船科主幹
1897（同 30）	10	呉海軍造船廠造船科主幹<海軍造船少技士>
12 <海軍造船中技士>		
12 <同大技士>		
1898（同 31）	10	造船監督官，英国出張
1901（同 34）	4	帰国
6 呉海軍造船廠造船科主幹		
1903（同 36）	9	<海軍造船少監>
11 呉海軍工廠造船部部員兼検査官兼海軍大学校教官		
1905（同 38）	9	<海軍造船中監>
1909（同 42）	10	呉海軍工廠造船部長<海軍造船大監>
1914（大正 3）	12	横須賀海軍工廠造船部長
1915（同 4）	2	工学博士
1918（同 7）	12	海軍技術本部第四部長<海軍造船総監>
1919（同 8）	9	<海軍造船少将＝官名改称>
1920（同 10）	10	海軍艦政本部第四部長
12 <海軍造船中将>		
1921（同 10）	6	予備役
1933（昭和 8）	5	退役

出所：海軍歴史保存会（1996）『日本海軍史』第9巻 将官履歴・上』

し，山田の軍歴を見る限り，明治31年10月1日から34年4月6日までは英国出張中である。「海軍造船中技士」の階級は1897年12月1日から同月26日までのわずか26日間であり，12月27日には「大技士」に昇進している。

従って山田の野球奨励は，英国出張以前の1898年9月まででなければ，つじつまが合わない。

この点に関して興味深い指摘がある。大正期に同工廠に入り，後に呉バレーボール協会会長

や広島県バレーボール協会副会長を務めた河野実一が，呉史談会記念誌に寄せた遺稿「海軍と呉のスポーツ」の文中で，「造船部製図工場主任の山田造船中技士が，製図工に虚弱な者が多かったので，体質改善のために野球を奨励し，明治31年に『造船野球チーム』が誕生した」⁴¹⁾と紹介している。中谷の「明治32年」の起源を否定し，「明治31年」と指摘した。だが，河野が記した山田の階級の「中技士」には，筆者は疑問を感じざるを得ない。

中谷、河野の著作による限り、呉野球発祥の年代については明確な結論を下せない。山田の中技士時代であれば明治30（1897）年12月があれば、河野の言う明治31（1898）年であれば階級は「大技士」でなければならないからである。いずれにせよ、呉での野球の起源は明治30年末から、山田の英国出張以前の同31年9月までの間、ということになる。

3.5 山田佐久の球歴

海軍士官となった山田は、どこで野球を習い覚えたのであろうか。工具に奨励し、しばしば練習を見学しては穏やかな視線を向け、時には自らコーチしたこともあったと、中谷の「呉野球史」には記述がある。

1866年東京生まれの山田は1890年7月、帝国大学工科大学造船学科を卒業している、この時期は1886年の帝国大学令、中学校令により学制が大きく変動した。山田の在籍が確認できたのは明治期の「第一高等中学校一覧」と「帝国大学一覧」による在学学生、卒業生名簿からである⁴²⁾。(年月は名簿の発行年であり、カッコ内は同級生人数。当時の学暦は9月～翌7月)

- ①1887年3月、第一高等中学校工科2年（29人）
- ②1887年7月、同高等学校卒（工科志望25人）
- ③1887年10月、帝国大学工科大学造船学科1年（4人）
- ④1888年11月、同学科2年（4人）
- ⑤1889年10月、同学科3年（4人）
- ⑥1890年12月、同学科卒業（4人）

第一高等中学校は言うまでもなく、旧制高校の最難関である第一高等学校の前身校である。その前身はいささか複雑で、開成学校から東京大学予備門となり、その後東京法学校、東京外国語学校などと合併した後、工部大学校予科を併合して1886年4月、第一高等中学校として発

足した⁴³⁾。同中学校工科2年在学として明らかになる山田の、一高以前の足取りははっきりしない。一高の前身たる大学予備門の在学名簿には見当たらない。

以下は筆者の推測であるが、東京育ちの山田は虎ノ門にあった工部省の工部大学校に在籍したのではなかろうか。後に進学したのが「工科」であり、法学校や外国語学校にいたとは考えにくい。帝国大学以前に東京大学が存在したが、大学予備門からの進学が前提だった。当時の進学ルートとして、大学予備門以外の高等教育施設の選択肢、それも工科希望であれば工部大学校へ進むのが自然であろう。

工部大学校は明治新政府の殖産興業の推進機関として設置された工部省の教育施設、工学寮（1873年創設）が1877年に校名改称したものである。予科2年、専門2年、実地科2年の6年制で、実学を重んじた。土木・鉱山・造船・化学・機械工学・電気工学・造家（建築）学の7学科で構成し、最後の入試となった1885年は190人余りが受験し合格は30人⁴⁴⁾という難関であった。一方で、入学後も授業や試験は厳しく、落第や退学が相次ぎ、工学寮開校の1873年から文部省へ移管された1885年12月までの入学生493人に対し、卒業生は211人に過ぎなかった⁴⁵⁾。

工部大学校は1885年に最後の卒業生を出した後、工部省から文部省に移管されて廃校となった。上級生たちのほとんどは1886年、新設の帝国大学工科大学（東大工学部の前身）に進み、予科生たちは、第一高等中学校へ編入した。工部大学校2年修了生は旧大学予備門出身者とともに第一高等中学校2年となった。大学予備門の在学名簿で確認できない以上、どう見ても一高2年の山田は工部大学校からの編入生と考えられるのである。廃校時の工部大学校在学名簿が見当たらないため、断言できないが。

筆者が山田の工部大学校在学説に固執するのは、明治10年代の工部大学校は極めて野球が盛

んだったからである。「旧工部大学校史料付録」(1928)という沿革史へ学生時代の思い出を寄せたOBたちの一文にしばしば野球に興じた記載がある。門野長五郎(1891年帝大工科卒)は「明治18年頃はこのゲームは相当に学生間に人気ありし、これに加わり練習をなしたり」⁴⁶⁾とし、中山秀三郎(1888年同卒)は「新橋鉄道局(新橋倶楽部)の連中の教えを受け成り立ち」⁴⁷⁾、丹羽鋤彦(1889年同卒)は「野球対抗試合は駒場の農学校としたのが最初のものだった」⁴⁸⁾などとする。

野球に関する山田の行状に触れたものでは、大阪朝日新聞社が1916年に創刊した「野球年鑑」(後に運動年鑑と改題)の中の「日本野球史」で、Ⅱ章既述の平岡鯉がつくった野球チーム、新橋倶楽部で教えを受けた者として「山田海軍大技士など」⁴⁹⁾として登場する。筆者は早大野球部主将を務め、同年朝日入りした橋戸信である。また、庄野義信が編集した「六大学野球全集」(1931年)収録の「球界事物起原録」にも同様の記述⁵⁰⁾がある。恐らく作者は同一人物(橋戸)であろう。

一方、海軍で造船・造兵・造機の技術士官を指す「大技士」の階級制定は1886年からである。「日本海軍士官総覧」⁵¹⁾によれば、明治期に山田姓の「海軍大技士」は2人しか該当者がおらず、上記の山田海軍大技士は山田佐久を指すと理解するのが妥当であろう。1866年生まれの子が工部大学校予科へ進み、15-16歳ごろ新橋倶楽部で平岡から野球の手ほどきを受けていたとすれば、後年、呉造船廠(工廠)で野球を導入し、時にはコーチをしたとする「呉野球史」の記述もうなずけるのである。

4. 工廠野球の波及効果

4.1 呉体育協会へ発展

呉海軍工廠で盛り上がる野球熱は、呉野球協会の組織化(1916年)に結び付き、「全呉」チー

ムの結成へと発展を遂げた。

これより先、待望の市立呉中学校が1907年に開校(後に県立移管し呉一中、現呉三津田高校)し、間もなく野球部ができた。工廠各チームの胸を借り次第に実力を付けていった。沢原俊雄市長の2男で当時、慶大野球部に在籍した沢原亮吉が休暇のたびにコーチしたという。「大呉市民史 明治編」1909年の項には「3月、工廠造船・造機製図工と呉中生の野球競技行われしが」⁵²⁾とあり、頻繁に先輩格の工廠勢と腕を磨いていたことが分かる。

新興の呉中野球部は1910年11月、岡山・第六高等学校(六高)主催の第4回近県中等学校野球大会で金川中、岡山中、広島中と次々に下し、決勝では関西中に2-1と競り勝って初陣ながら優勝を飾った。翌年8月、松山遠征で松山中に勝利を収め、勢い込んで臨んだ六高近県大会では福山中、丸亀中を退け、決勝の岡山中戦では3-0で完封勝ちし、2年連続優勝を遂げた。岡山、広島はもとより、四国や兵庫県から計15チームが集う盛大な大会を連覇した呉中の評価は高かった。しかし、呉中は連勝した翌1912年、「特定の部が校友会費を多額に消費すべきではない」という校長の判断で休部を余儀なくされてしまった⁵³⁾。

呉中野球部の火は消えたが、工廠各部の野球チームは増え続けるばかりで1919年の協会加盟は発足時の17を上回る24チームが登録している⁵⁴⁾。

工廠の熱気に続いて海軍呉海兵団にも野球チームが誕生した。1920年、軍隊教育規則が定められ、海軍では従来の武技、体操に加えて新たに相撲や蹴球、野球、スキーなどの「体技」が採用された。この規定によって野球などが軍隊教育の一部として明確に示されたのである。同海兵団は早速、旧兵、新兵、機関部3チームがしのぎを削り、工廠野球チームとの練習試合も組んだ⁵⁵⁾。

野球を発端とする海軍呉工廠、海兵団などのスポーツ熱の高まりは1919年、「呉体育協会」結成へと発展していった。呉野球協会が母体ではあったが、野球に偏することなく「各種運動団体を網羅する体育協会を創設し、常に体育の向上発展を期する」と発会式で天野健太郎市長は祝辞を述べた。

呉体育協会に名を連ねたのは野球、庭球、卓球、陸上、相撲、水泳の6競技で、連合運動会などの開催を決めた。会長には慶大卒業後、帰郷して家業、沢原銀行専務の沢原亮吉が就いた⁵⁶⁾。呉野球協会は呉体育協会の下部組織として野球部を名乗った。大日本体育協会は1911年に創設されていたが、自治体独自の体協組織化は画期的であった。県内の競技団体を統括する広島県体育協会は1930年、広島市体育協会は1937年の発足⁵⁷⁾であり、県や他都市に先駆けた呉市のスポーツ統括団体発足の取り組みは先進的であったと言えよう。

4.2 「野球市」の異名

明治末から大正期にかけて飛躍的に発展した呉の野球は、戦前昭和、大きな実りを見せた。多くの好選手を輩出し、全国中等野球大会での優勝に結び付いた。呉工廠野球のすそ野は広がり、「野球市」の趣を見せていた⁵⁸⁾。

主に工廠選手からピックアップした全呉チームはしばしば、遠来の東京五大学（当時）の慶応大、明治大、立教大、法政大と対戦したほか、シアトル朝日（1917年）全ハワイ（1920年）サンノゼ旭（1925年）サクラメント野球団（同）などの来日各チームと試合を組んでいる⁵⁹⁾。

実業団チームとして頭角を現した呉勢は、1920年から大阪朝日新聞社が始めた全国実業団野球大会に参加した。第1回は同年呉工廠火薬部チーム（呉火薬）が初勝利を挙げ、3回大会から全呉として出場した。東京日日新聞（現毎日新聞東京本社）が1927年に開始した都市対抗

野球大会には全呉チームとして出場、戦前最後となった1942年の16回大会まで計10回、実業団日本一の戦いの場に臨んだ⁶⁰⁾。

「野球市」呉に1928年、大正中学校が開校し、武田甲斐人校長自ら野球部創設を呼びかけた。部長に就任した柳原良助教諭は前任校の山口県柳井中の卒業生で早大選手の杉田屋守らを臨時コーチに招いて強化を図った。むろん、海軍工廠各チームの胸も借りた。部創立5年目の1932年、夏の広島県大会、山陽大会を突破して甲子園に進んだ。1933年には呉港中学校と校名を改称したが、甲子園の連続出場は切れ目がなかった。4年目となった1934年には念願の全国制覇を果たしたのである⁶¹⁾。

中学野球に劣らず学童の野球もまた呉に根付いた。多くは呉海軍工廠従業員の子弟であった。とりわけ強豪と目されたのは市街地にある五番町小学校（当時は尋常高等小学校）で、1926年以降毎年のように、関西で開かれていた軟式の全国少年野球大会へ出場した。

全国大会は1920年に大日本少年野球協会が第1回大会を開き、1925年から広島県大会が始まった。広島、山口両県の2次予選を経て全国大会へ進むのは難関だった。五番町小は1928年

表4 呉港中学校の甲子園大会の成績

年	選抜大会		選手権大会	
	回	成績	回	成績
1932	9		18	2回戦
1933	10	2回戦	19	ベスト8
1934	11	1回戦	20	優勝
1935	12		21	ベスト8
1936	13	2回戦	22	2回戦
1937	14		23	ベスト8
1938	15		24	
1939	16	2回戦	25	

出所：広島県高校野球連盟（2000）「広島県高校野球五十年史」から引用転載

に準々決勝、1931年はベスト4へ進出した⁶²⁾。同大会は1932年、文部省の発した「野球統制令」により廃止される。各地で過熱する少年野球の弊害から、統制令は「宿泊を伴う小学野球の試合を禁じた」⁶³⁾のである。全国大会出場が望めなくなった小学球児たちは、中学野球へ活路を求め、地元の大正中（後に呉港中）や広島商業、広陵中などへ進み、今度は甲子園出場を目指したのである。

4.3 名選手を輩出

呉工廠の子弟やゆかりのある呉生まれの野球選手は戦前、数多く活躍している。ここでは元プロ野球選手3人の関わりを紹介したい。

戦後、投手兼任監督として阪急に入団し、48歳でマウンドに上がった浜崎真二（1901年生）は、呉高等小学校から広島商業へ進んだ。2年の1917年、夏の甲子園（3回大会、当時は鳴尾球場）1回戦で8番・右翼手として出場した。しかし、その後部内のトラブルに巻き込まれて退学し、地元の呉工廠製鋼部に籍を置いていた。半年後、兵庫・神戸商業へ転校して今度は1922年の夏、第8回大会では主戦投手として登板し、決勝で和歌山中学に敗れている。広島商、神戸商と異なる2校で夏の甲子園の選手経験がある稀有な存在である。

浜崎は慶大卒業後、満州の大連実業など社会人野球に進み、戦後プロ球界入りして阪急、国鉄などの監督を歴任している⁶⁴⁾。

1934年呉港中学の甲子園制覇に貢献した藤村富美男（1916年生）は父親鉄次郎と次兄・清章が呉工廠の従業員であった。兄清章は工廠「船友」チームに所属し全呉軍メンバーでもあった。1927年の第1回都市対抗野球大会の1回戦、6番・二塁手に名前がある。藤村に野球を仕込んだのはこの次兄という。

呉高小から大正中に進んだ藤村はチームの大黒柱で、4年連続甲子園出場を果たし、最後は

全国制覇と明治神宮大会優勝を経験している。卒業後は職業野球、阪神（当時は大阪タイガース）入りした。持ち前の豪打で「ミスタータイガース」と呼ばれて人気を集めた。プロ19年間で1,694安打、224本塁打、通算打率は3割ちょうど。投手としても34勝をマークした⁶⁵⁾。

藤村と同年生まれの鶴岡一人の父親兵吉も工廠建築部にいた。実家は二河グラウンドのすぐそばで、五番町小では2度全国少年大会へ出場した。広島商では1931年の選抜大会優勝メンバーとなり、米国遠征も経験した。法政大で主将を務め、1936年にプロ野球の南海へ進んで新人ながら主将で10本塁打しタイトルを握った。三塁手としての実働は8年で通算打率2割9分5厘。むしろ南海監督として通算23年間でリーグ優勝11度、日本シリーズ優勝2度、1,773勝の勝利数は歴代1位である⁶⁶⁾。呉市出身の代表的な3選手はいずれも呉工廠にゆかりがあり、父親や兄弟が工廠勤務という環境も似通う。幼少期に工廠野球の与えた影響が底流にあり、選手や指導者として球界で大成した彼らに共通しているのではあるまいか。

浜崎、藤村、鶴岡以外にもプロ野球に進んだ呉出身選手は多い。戦前、プロ（職業）野球に在籍した呉出身や呉工廠育ちのプレーヤーは以下の通りである。

表6 戦前、プロ野球入りした呉市出身選手

浜崎	博（名古屋金鯱）1919生	呉二中
塚本	博睦（阪神、阪急、西鉄、広島）1918生	呉港中－立大
藤村	隆男（阪神、太陽、阪神、広島）1921生	呉港中
竹林	実（名古屋金鯱）1920生	呉港中
保手浜	明（東京セネタース）1917生	呉港中
原	一朗（阪神、大東京、ライオン）1918生	呉港中
浅井	太郎（名古屋金鯱）1914生	大正中
橋本	正吾（阪神、阪急）1916生	呉港中－専大

表7 戦前、プロ野球入りした呉工廠出身選手

重松 通雄（阪急、西鉄、金星、西日本）1916生 愛媛・越智中
倉本 信護（阪急、名古屋、名古屋金鯱）1913生 広陵中
上田 正（阪神）1914生 広島・松本商
大原 敏夫（阪急）1918生 愛媛・越智中
荒川 正嘉（名古屋金鯱）1912生 呉二中

出所：社団法人日本野球機構（2004）「日本プロ野球記録大百科」ベースボール・マガジン社

4.4 呉スポーツ界の温床

呉工廠各部の野球チームが母体の呉野球協会から、全市的なスポーツ統括団体として生まれた呉体育協会は、野球以外の競技に大きな刺激を与え、活性化を促したのである。中心選手は「東洋最大の軍需工廠」呉工廠の従業員であることが多かった。

同体育協会結成の1918年、工廠従業員は29,758人と3万人に迫った⁶⁷⁾。春秋の工廠運動会は市民の一大行事となり、陸上競技種目から有望選手が登場し始めた。おりから、前年の日本陸上選手権 5,000 m に16分38秒0の日本新記録を出した広島師範出身の長距離ランナー、伊達洋造が呉高小に赴任した。呉の陸上熱は高まり、工廠選手や伊達らを中心に「呉オリンピック倶楽部」が発足、各種目で好選手が出現する。広島との対抗戦も始まっている⁶⁸⁾。

呉オリンピック俱の工廠選手からは1924年の第1回明治神宮大会青年走り高跳び優勝の松木崑、2回大会砲丸投げ2位の高祖時義らが現れた。長距離の三村賢治、200 m 障害（当時）の三宅正之は1930年の極東選手権大会（東京）代表になるなど日本的な選手に成長した。運動競技の対外試合禁止のため自校での活動が困難となった呉一中のやり投げ選手住吉耕作は、呉オリンピック俱の練習に自主参加して記録を伸ばし、後年、早大へ進んでロサンゼルス五輪代表に成長した⁶⁹⁾。

バレーボールも工廠の「お家芸」となった。当初、職場のレクリエーションであったが、1922年、砲煩部に「壬子（じんし）倶楽部」が結成され、前出の河野実一（元広島県バレーボール協会副会長）が主将となり、第2回明治神宮大会へ出場、翌年には水雷部にもチームが生まれ、腕を磨き合った。神宮大会では4回大会で水雷が準優勝し、工廠チームとして一本化した7回大会に優勝（1933年）し以後、2度の優勝を飾る。全日本選手権では1928年に水雷が準優勝したのを手始めに、単独あるいは全工廠チームは3度全国制覇を遂げ、極東大会に代表選手を送り込んだ⁷⁰⁾。

卓球は工廠砲煩部の技手を中心に大正末期から「廠友会」として活動し、呉卓球協会を組織した。1926年に工廠入りした二本唯一は1931年の東西対抗個人戦で優勝した。

海軍の内部で盛んであったサッカーやラグビーなども工廠に普及していた。サッカーは1926年、呉蹴球倶楽部として旗揚げし、呉ラグビー協会は1933年にできている⁷¹⁾。ラグビー経験のある海軍機関学校や京大出身の技術士官らが手ほどきしたと考えられる。

工廠のスポーツ熱は中学校や高等女学校にも波及していった。中等野球の呉港中の活躍を待つまでもなく、各競技に影響を及ぼしている。とりわけ、バレーボールは女学校で急速に普及し、土肥高女は1937年の全日本選手権で準優勝した。同高女は1942年の明治神宮大会でも決勝に進出している⁷²⁾。

軍港呉の女学生たちは水泳でも強さを発揮し、土肥高女と精華高女（後に統合し、現清水ヶ丘高校）が全国大会でしのぎを削った。精華高女の金森志都子は1941年、女子 50 m 背泳ぎで38秒2の日本新記録をマークしている⁷³⁾。サッカーの呉興文中学校（後に芸南高校、廃校）は1931年の神宮大会兼全日本選手権で学生、社会人を下して決勝に進出、東大に敗れたものの準

優勝という好成績を残している⁷⁴⁾。

軍艦を中心とする兵器生産の操業がピークとなった戦前末期、呉工廠は10万人近い従業員を抱えた。戦雲激化の直前、呉のスポーツ界は熱気に彩られていたのである。

5. まとめ～なぜ工廠で野球が普及・発展したか

明治期、工廠従業員の体力・体質改善を目指して、一人の海軍技術士官が従業員に野球を奨励したことから呉の近代スポーツはスタートした。やがて独自の野球協会を結成するまでに発展した要因は何であったろうか。初期の工廠野球に着目して整理したい。

5.1 工廠首脳部の理解

工廠野球がすそ野を広げた原因はまず、工員たちを指導・監督する上層部の野球への深い理解があったためであろう。

創始者の元造船中将山田佐久は呉へ赴任後、造船部主幹－検査官－造船部長と呉工廠造船部の中枢を占め、最後は海軍省艦政本部第4部長と、軍艦建造部門のトップに就いた。その山田は若き日、東京の新橋アスレチック倶楽部や工部大学校予科などで白球を追っていた可能性がうかがえる。あるいは、第一高等学校や帝国大学工科大学時代にたしなんでいたとも推測される。そうした自身の野球への原体験が、虚弱体質気味な工員たちへの野球奨励となって具現化したのではないだろうか。いかに階級が上昇しようとも終始、練習する工員たちに穏やかな視線を送ったという事実が物語る。

山田よりやや遅れて造兵大技士として呉に赴任し、1915年から6年間呉工廠製鋼部長を務めた元海軍造兵中将、野田鶴雄も理解を示した一人である。野田は慶応義塾普通部の中学時代から野球に関心を持ち、第二高等学校、帝大工科大を通じ野球部に友人がいたという。1915年、

大阪・豊中グラウンドでの第1回全国中等野球大会を観戦に出かけたほどの野球好きであり、時には審判を買って出た。野田の真骨頂は、海軍射的場跡地の公園整備計画に対し、呉市長に専用球場建設を要請(1914年)したことであった。「公園も結構だが、ぜひ専用競技場を設けて工場都市としての本邦第一の面目を発揮しては如何と申し出た」と後年、呉の野球の思い出を書き残している⁷⁵⁾。

工廠の技術士官は概ね東京帝大、海軍機関学校、海軍兵学校出身者に大別される。中でも帝大工科大学、東大工学部出身の技術エリートが最大勢力である。呉工廠の山田、野田をはじめ、部長級の幹部は帝大組が圧倒的に多い。彼らは海兵出身らとは異なり、武官でありながら軍人的色彩は比較的薄く、技術者の感覚に近かったのではなかろうか。さらに言えば海軍式リベラルで柔軟な思考や風潮も併せ持っていたのではないか。こうした開明派士官が野球を奨励し、高官でありながらコーチや審判を買って出る行動がとれたのではなかろうか。

5.2 慰安的側面

工員への野球奨励は一方で、工廠労働者への労務管理の一環として、慰安的な側面があったとも推測できるのである。

国内屈指の規模を誇った軍需工場である呉工廠では明治期、3度の大規模な争議が発生している。まず、1902年7月、呉造船廠の厳しい労務管理に反発した争議で5,390人が参加したストライキが発生した。工廠となった後の1906年、さらに1912年と大規模な争議が起き、多数が検挙されている。いずれも非人道的な処遇に対し、労働者の尊厳を求めての自然発生的なものであったという⁷⁶⁾。

大正期以降、大規模な労働争議発生は記録されていない。むしろ、労使協調路線を取る穏健な組合である呉官業労働組合海工会が1924年に

結成され、以後の軍縮による大量解雇の際も平穩に推移する⁷⁷⁾。この間、勤続奨励のための各種加給などで優遇した。福利厚生面では1923年に付属費に「慰安」の項目が加わり、工員に別途支給された。1931年には「体育普及費」と具体的な名目となった⁷⁸⁾。文字通り、当局のお墨付きでスポーツを奨励したのである。

呉工廠での野球普及も、この労務政策に沿った措置ではなかったのではないだろうか。野球によって工場内の融和を図り、労働環境への不満の受け皿としても機能していたに違いない。

5.3 各部、工場の対抗意識

呉鎮守府の造船、造兵2部門を統一して1903年に発足した呉海軍工廠は、日露戦争や第一次大戦などを経て拡大を繰り返した。造兵部が砲煩部と水雷部に分離し、その後の軍備拡充策に合わせて肥大化の一途をたどる。

相次ぐ工場の増設で野球チームは拡散を繰り返す。大正末には40近いチームがひしめき合い、呉日日、中国、大阪朝日各新聞社主催の野球大会や呉野球協会の春秋の大会、工廠各部の私的なゲームまで、野球チームは多忙を極めた。

1924年には、工廠各部（造船、造機、水雷、砲煩、製鋼、総務）対抗野球大会が始まった。部内の各工場からチームの優秀選手を選抜し、部の対抗大会（工廠大会）として覇を競い、毎年1回開催されることになった⁷⁹⁾。工廠ナンバーワンを決める大会は、ことのほか耳目を集めたという。

1937年に17歳で呉工廠に入った当時の工員は「3年間、工廠製鋼部の野球部にいた。砲煩や水雷など各部の対抗戦が盛んだった」と後にテレビ番組で証言⁸⁰⁾している。

戦局が深まり、戦艦「大和」建造中でありながら呉工廠では野球が行われていたことに驚きを感じるとともに、こうした対抗戦や全呉チームの選手選抜が、工廠野球の技量を高め、レベ

ルアップにつながったのも事実であろう。しばしば試合中にトラブルを起こしながら、東京の都市対抗大会常連チームとなる強豪の土壌となったのである。

明治30年代はじめ、東京育ちの技術士官が持ちこんだ野球は、海軍艦艇の建造や兵器生産に従事する工員たちに広まり、独自の呉のスポーツ文化を形成していった。そこには教育機関を通じて発展した他都市の野球の普及過程とは一線を画した、工廠野球、海軍野球とも呼ぶべき発展のプロセスがあった。

最も大きな波及効果は、工廠内の親睦組織にとどまることなく、呉野球協会の結成につながり、さらに全市的なスポーツ統括団体である呉体育協会の進展へとつながるのである。同時に、工廠従業員の子弟や近隣諸学校のスポーツ活性化にも大きな影響を与えたのである。

日本独自の実業団スポーツ発展の過程を見る時、ここまで地域に根差し、影響を及ぼしたチームが存在したのだろうか。多くの企業スポーツチームとは性格を異にし、本来閉ざされた組織であるはずの海軍の一機関（工廠）であっただけに、驚きは大きい。さらに言えば、同じ海軍工廠の街でありながら横須賀や佐世保には、呉のようなスポーツに特化した事例がうかがえないことから明らかである。

世界最大の戦艦「大和」を建造（1941年）した呉海軍工廠は終戦の1945年、11月30日をもって解体した⁸¹⁾。海軍とともに歩んだ呉市民は解体、消滅に伴って多くの犠牲を払った。かつての工廠従業員たちは職を失い、街の活気は消えた。旧海軍はある意味で市民にとって負の遺産ともなった。だが、戦前の一時期、スポーツ界において光彩を放ったのは事実である。その意味では呉工廠野球の果たした役割は評価に値しよう。

注

- 1) 鶴岡英一 (1973)「明治期における広島県中学校の校友会運動部について」『体育学研究』18(1), p. 10
- 2) 広島県立呉三津田高等学校 (2006)『三津田ヶ丘』創立百周年記念実行委員会, p. 23
- 3) 高嶋 航 (2015)『軍隊とスポーツの近代』青弓社
- 4) 呉市史編集委員会 (1964)『呉市史 第三巻』呉市役所, pp. 28-30
- 5) 呉市史編集委員会 (2002)『呉の歴史』呉市役所, pp. 153-160
- 6) 弘中柳三 (1943)『大呉市民史 明治篇』呉新興日報社 (1977年「大呉市民史」刊行委員会復刻版), p. 26
- 7) 「呉郵便局」『読売新聞』1887年4月7日付朝刊, p. 3
- 8) 呉海軍工廠編 (1981)『呉海軍工廠造船部沿革誌』あき書房 (復刻版), pp. 1-20
- 9) 呉共済病院 (2004)『呉共済病院100年史』, pp. 36-37
- 10) 前掲書『呉の歴史』, pp. 216-219
- 11) 君島一郎 (1972)『日本野球創世記』ベースボール・マガジン社, pp. 19-20
- 12) 神田順治 (1989)『野球殿堂物語』ベースボール・マガジン社, pp. 53-54
- 13) 同書, pp. 56-57
- 14) 黒田 勇 (2012)『メディアスポーツへの招待』ミネルヴァ書房, pp. 5-7
- 15) 広島県立広島国泰寺高校創立百周年記念事業会 (1977)『広島一中国泰寺高百年史』広島国泰寺高校, pp. 147-148
- 16) 誠之館百三十年史編集委員会 (1988)『誠之館百三十年史 上巻』福山誠之館同窓会, p. 586
- 17) 林 勲編著 (1983)『尾道商野球部史』, p. 2
- 18) 広島県立三次高等学校同窓会 (1960)『巴峽』, p. 29
- 19) 広島商野球部百年史編集委員会 (2000)『広島商野球部百年史』広島県立広島商業高等学校, p. 41
- 20) 山口高等商業学校 (1940)『山口高等商業学校沿革史』, pp. 460-461
- 21) 鳥取県立鳥取西高等学校 (1987)『鳥取西高野球部史』, p. 1
- 22) 鳥根県高等学校野球連盟 (1984)『鳥根県高校野球史』, p. 26
- 23) 山陽新聞社 (1991)『球譜一世紀 おかやまの野球』, pp. 8-10
- 24) 前掲書『三津田ヶ丘』, p. 12
- 25) 同書, p. 17
- 26) 中谷白楊 (1926)『呉野球史』, p. 8
- 27) 同書, p. 8
- 28) 前掲書『呉共済病院100年史』, p. 47
- 29) 前掲書『呉野球史』, p. 9
- 30) 「運動界 野球界小言」『中国新聞』1907年10月12付朝刊, p. 3
- 31) 「野球仕合」『中国新聞』1907年11月5日付朝刊, p. 3
- 32) 前掲書『呉野球史』, p. 24
- 33) 同書, p. 23
- 34) 弘中柳三 (1956)「野球界」『大呉市民史 大正篇下巻』, p. 143
- 35) 同書, p. 143
- 36) 前掲書『呉野球史』, p. 34
- 37) 同書, pp. 33-45
- 38) 中国新聞呉版『野球協会発会式』1916年7月17日付朝刊, p. 4
- 39) 小泉葵南 (1920)「全国球界の現状」『野球新教範』岡村盛花堂, pp. 23-24
- 40) 小泉葵南 (1921)「全国野球人国記」『ベースボールの見方』先進堂, pp. 26-27
- 41) 河野実一 (1988)「海軍と呉のスポーツ」『呉史談会20周年記念誌 回顧と展望Ⅱ』呉史談会, p. 19
- 42) 国立国会図書館『近代デジタルライブラリー』(<http://kindai.ndl.go.jp>)「第一高等学校一覧」「帝国大学一覧」各年代から引用
- 43) 東京大学百年史編集委員会 (1984)『東京大学百年史 通史一』東京大学, pp. 985-989
- 44) 前掲「文部省年報 明治19年」『近代デジタルライブラリー』
- 45) 前掲書,『東京大学百年史 通史一』, p. 692
- 46) 旧工部大学校史料編集委員会 (1928)『旧工部大学校資料付録』青史社 (復刻版), pp. 140-142
- 47) 同書, p. 144
- 48) 同書, p. 146
- 49) 大阪朝日新聞社 (1916)「日本野球史」『野球年鑑 大正五年』, p. 57
- 50) 庄野義信 (1931)「球界事物起原録」『六大学野球全集』改造社, p. 8
- 51) 海軍義済会編 (1943)『日本海軍士官総覧』柏書房 (2003年復刻版)
- 52) 前掲書,『大呉市民史 明治篇』, p. 687
- 53) 呉市史編集委員会 (1987)『呉市史 第五巻』呉市役所, p. 574
- 54) 前掲書,『呉野球史』, p. 53
- 55) 前掲書,『大呉市民史 大正篇下巻』, p. 150
- 56) 前掲書,『呉市史 第五巻』, pp. 757-758
- 57) 広島県体育協会 (1984)『広島スポーツ史』, p. 62, p. 556
- 58) 呉市史編集委員会 (1976)『呉市史 第四巻』呉市役所, pp. 579-580
- 59) 前掲書,『呉野球史』, p. 42, p. 46, p. 49, p. 60, p. 89, p. 92, p. 98, p. 102
- 60) 日本野球連盟・毎日新聞社 (1990)『都市対抗野球大会60年史』, p. 430
- 61) 学校法人呉武田学園 (2006)『呉武田学園史』, pp. 137-148
- 62) 前掲書,『呉市史 第五巻』, p. 739
- 63) 山室寛之 (2010)『野球と戦争』中公新書, 中央公論新社, p. 21
- 64) 浜崎真二 (1983)『48歳の青春』ベースボール・マガジン社

- 65) 南 萬満 (1996)『猛虎伝』新評論
- 66) 鶴岡一人 (1965)『わしの野球』講談社
- 67) 呉市史編纂委員会 (1988)『呉市史 第六卷』
呉市役所, p. 283
- 68) 前掲書,『呉市史 第五卷』, p. 744
- 69) 広島陸上競技協会 (2003)『広島陸協七十年の歩み』, p. 17
- 70) 呉バレーボール協会 (2008)『創立80周年記念誌』, pp. 3-28
- 71) 前掲書,『呉市史 第五卷』, pp. 756-757
- 72) 前掲書,『創立80周年記念誌』, pp. 20-25
- 73) 学校法人清水ヶ丘学園 (1982)『清水ヶ丘30年のあゆみ』, pp. 313-314
- 74) 広島県サッカー協会 (2010)『栄光の足跡 広島サッカー85年史』, p. 35
- 75) 前掲書,『呉野球史』, 序文
- 76) 前掲書,『呉共済病院100年史』, pp. 41-42
- 77) 前掲書,『呉市史 第六卷』呉市役所, p. 283
- 78) 高嶋 航 (2013)「『菊と星と五輪-1920年代における日本陸海軍のスポーツ熱』『京都大学文学部研究紀要第52号』, pp. 222-223
- 79) 前掲書,『呉野球史』, p. 82
- 80) 徳川敏明の証言, NHK テレビ (2012年6月1日放映)『巨大戦艦大和〜乗組員たちが見つめた生と死』
- 81) 株式会社呉造船所 (1968)『船をつくって八十年』, p. 145

参 考 文 献

- 大阪朝日新聞社 (1916)『野球年鑑 大正五年』
海軍義済会編 (1943)『日本海軍士官総覧』柏書房 (2003年復刻版)
株式会社呉造船所 (1968)『船をつくって八十年』
学校法人呉武田学園 (2006)『呉武田学園史』
学校法人清水ヶ丘学園 (1982)『清水ヶ丘30年のあゆみ』
神田順治 (1989)『野球殿堂物語』ベースボール・マガジン社
君島一郎 (1972)『日本野球創世記』ベースボール・マガジン社
木村毅編 (1972)「正岡子規 ベースボール勝負附」『明治文化資料叢書』風間書房
旧工部大学校史料編纂委員会 (1928)『旧工部大学校資料付録』青史社 (復刻版)
呉海軍工廠編 (1981)『呉海軍工廠造船部沿革誌』あき書房 (復刻版)
呉共済病院 (2004)『呉共済病院100年』
呉公論社編 (1985)『復刻 呉 明治の海軍と市民生活』あき書房
呉市史編纂委員会 (1964)『呉市史 第三卷』呉市役所

- 呉市史編纂委員会 (1976)『呉市史 第四卷』呉市役所
呉市史編纂委員会 (1987)『呉市史 第五卷』呉市役所
呉市史編纂委員会 (1988)『呉市史 第六卷』呉市役所
呉市史編纂委員会 (2002)『呉の歴史』呉市役所
呉史談会 (1988)『呉史談会20周年記念誌 回顧と展望Ⅱ』
呉バレーボール協会 (2008)『創立80周年記念誌』
黒田 勇編著 (2012)『メディアスポーツへの招待』ミネルヴァ書房
笹本 毅 (1994)『呉ノ歴史』自費出版
財団法人日本野球機構 (2004)『日本プロ野球記録大百科』ベースボール・マガジン社
山陽新聞社 (1991)『球譜一世紀 おかやまの野球』
島根県高等学校野球連盟 (1984)『島根県高校野球史』
庄野義信編著 (1931)『球界事物起原録』『六大学野球全集』改造社
誠之館百三十年史編纂委員会 (1988)『誠之館百三十年史 上巻』福山誠之館同窓会
鶴岡一人 (1965)『わしの野球』講談社
東京大学百年史編集委員会 (1984)『東京大学百年史 通史一』東京大学
鳥取県立鳥取西高等学校 (1987)『鳥取西高野球部史』
日本野球連盟・毎日新聞社 (1990)『都市対抗野球大会60年史』
中谷白楊 (1926)『呉野球史』
浜崎真二 (1983)『48歳の青春』ベースボール・マガジン社
林 勲編著 (1983)『尾道商野球部史』
広島県高等学校野球連盟 (2000)『広島県高校野球五十年史』
広島県サッカー協会 (2010)『栄光の足跡 広島サッカー85年史』
広島県体育協会 (1984)『広島スポーツ史』
広島県立呉三津田高等学校 (2006)『三津田ヶ丘』創立百周年記念実行委員会
広島県立広島国泰寺高校創立百周年記念事業会 (1977)『広島一中国泰寺高百年史』広島国泰寺高校
広島県立三次高等学校同窓会 (1960)『巴峡』
広島野球部百年史編集委員会 (2000)『広島野球部百年史』広島県立広島商業高等学校
広島陸上競技協会 (2003)『広島陸協七十年の歩み』
弘中柳三 (1943)『大呉市民史 明治篇』呉新興日報社 (1977年「大呉市民史」刊行委員会復刻版)
弘中柳三 (1956)『大呉市民史 大正篇下巻』
南 萬満 (1996)『猛虎伝』新評論
望月澄男 (2011)『有坂鉦蔵』三樹書房
山口高等商業学校 (1940)『山口高等商業学校沿革史』
山室寛之 (2010)『野球と戦争』中公新書, 中央公論新社